

ウイメンズ ブックス 第30号

1989年
2月20日発行
(年会費 1,800円)

Women's Books

ウイメンズ ブックストア

発行所 有限会社 松香堂書店

602 京都市上京区下立売通西洞院西入る

TEL.FAX 075-441-6905

振替貯金口座 京都8-7950

——女性の本と女性の為の情報をお知らせするウイメンズブック友の会会報——

ウイメンズブック目録 (30)

このリストの書籍を御希望の方は、同封の振替用紙の通信欄でお申込み下さい。書籍代は送料共でお振込み下さいませようお願い致します。
ご注文の本の定価の合計額に、右の表の送料を合せてお送り下さい。なお、お電話でのご注文も受け付けています。

1,000円以下の場合	300円
1,001円～3,000円の場合	400円
3,001円～5,000円の場合	500円
5,001円～10,000円の場合	600円
10,001円以上の場合	700円

近代日本女性史

〔通史—明治・大正・昭和〕

『祖母・母・娘の時代』 鹿野政直、堀場清子
岩波書店(ジュニア新書) 1985年 650円
明治維新から今日までの日本の女性の足跡をたどりながら、女性のもつ問題点を検討する。生活・問題・運動の三点をとらえ、若い世代に向けて書かれたていねいで著者の思い入れの深い本。本書のような女性史を娘たちに読ませたいと思う。

『日本女性史 全5巻』 女性史総合研究会
東京大学出版会 1982年～1983年 各巻 1800円
従来の婚姻史・運動史・人物中心の女性史的考察だけにかたよることなしに、歴史のなかの女性の実像に迫るために、各時代における女性の地位、性別役割分担などを中心に総合的な課題設定を計っている。各界から注目の本格的な女性史研究の成果。(分売可)

4 近代

近代は女性解放の契機とはなかったが、一方で新たな差別と抑制をつくり出した。近代が生み出した女性への差別の実態を解放への視点から分析する。文明開花と女性の地位、明治民法と女性の権利、明治社会主義運動と女性、他。

5 現代

大正デモクラシーに育まれた婦人運動から戦後の女性解放運動まで。現代に生きる日本女性の方向を示す。日本女性史の最終巻。

『人物婦人運動史—明治・大正・昭和のあゆみ』

金森トシエ 労働教育センター 1980年 1200円
明治期に出そろうた女性の要求—婦選なくして普選なし。おしゃもじ運動も公害闘争も。主婦連と並んだ大衆婦人運動—母親大会。巻末に1869～1979年までの婦人運動史年表がついている。

『愛の現代史 全5巻—「婦人公論」の手記の証言』

瀬戸内晴美編・解説 中央公論社 1984年 各1200円
「婦人公論」70年の歴史を彩った女性たちの手記で綴る現代女性史。

- 1 愛と自由を求めて
- 2 愛と自由のはざままで
- 3 愛とその傷み
- 4 愛とその謳歌
- 5 愛と情熱の未来

『大正デモクラシーと女性—歴史と女性シリーズ』 残部僅少 井手文子、江刺昭子 合同出版 1977年 1500円
大正デモクラシーののこしたもの 無産階級運動と女性。

『日本ファシズムと女性—歴史と女性シリーズ』

残部僅少 吉見周子編著 合同出版 1977年 1500円
革命とファシズムのあらしのなかの女たち 軍国主義下の婦人政策と女性の協力 最前線の女性 銃後の滅私奉公他。

『戦後史と女性の解放—歴史と女性シリーズ』 残部僅少
絲屋寿雄、江刺昭子 合同出版 1977年 1500円
民主主義をもとめて—占領下日本の女性 冷たい戦争と民主主義の後退 大衆の平和・婦人運動の高まり。

『婦人参政権運動小史』 市川房枝監・児玉勝子著
ドメス出版 1981年 2000円
婦選獲得同盟と婦人問題研究所のぼう大な資料を駆使した婦人参政権運動の通史。

『水平線をめざす女たち—婦人水平運動史』 鈴木裕子
ドメス出版 1987年 1500円
1922年の全国水平社創立の翌年に婦人水平社も設立された。婦人水平社の活動家とその運動は数ある水平運動史(部落解放運動史)中で触れられることは少なかった。特に女性史を勉強するひとは当然ながら女性差別に敏感であるが、それと同じに部落差別に敏感であろうか?と著者自身への問題もふくめて、女性水平運動史にとりくんだ貴重な記録。

『母性保護運動史』 桜井絹江 ドメス出版
1987年 2300円
母性保護運動はわが国の資本主義的合理化による長時間労働、超過密労働の結果ひきおこされた母性破壊に対する抵抗として戦前から今日まで闘われてきた。本書はその足跡をたどる貴重な資料。今日の均等法と労働法まで記述されている。巻末には母性保護運動史が付記されている。

『華の乱』 永畑道子著 新評論 1987年 2200円
明治末から大正・昭和初期の女性論争、婦人労働、廃娼運動、女性誌の発行など晶子、らいてう、野枝、菊栄、わか、など華やかな女性論の荷い手たちの活動、主張を中心に軌道を追う女性史風物語。

『近代日本看護史 全4巻』 亀山美知子 ドメス出版
1984年~1985年
山川菊栄賞を授賞したフェミニズム視点で書かれた看護史の力作。
1 日本赤十字社と看護婦 3800円
2 戦争と看護 3500円
3 宗教と看護 3800円
4 看護婦と医師 4000円

『服装の歴史 全5巻』 村上信彦 理論社
1978年 各1300円
性によって服装がなぜ違うのか? 社会における男と女の関係の歴史と有機的に関連づけることで初めて服装の問題を合理的に捉え服装研究に画期的な視点を打ち立てた全5巻の力作。

- 1 キモノが生まれるまで
- 2 キモノの時代
- 3 ズボンとスカート
- 4 戦後服装史
- 5 時評と批判

『近代日本婦人教育史』 千野陽一 ドメス出版
1979年 3300円
自由民権運動と婦人の学習 キリスト教主義婦人団体の活動と学習 仏教婦人会の組織化と婦人会活動 大陸侵略戦争と婦人の集団活動など第二次大戦までの既婚女性を中心とした教育・学習活動の歴史的展開の過程を究明。

『女の教育100年』 金森トシエ、藤井治枝
三省堂選書 1977年 1000円
婦人教育はいつも国家や産業社会の要求にそって動かされてきた。各時代の女子教育の内容や方向を探る読みもの風女性史。

『この百年の女たち—ジャーナリズム女性史』 岡 満男
新潮社 1983年 780円
明治以後、ジャーナリズムにあらわれた女たちとその生活をたどり、男中心社会の実態を批判し、性差別の視点を廃して新聞界に“女の目”をと説く。

『婦人解放の道標—日本思想史にみるその系譜』
武田清子 ドメス出版 1985年 1400円
日本の思想史の展開過程において、婦人の問題がどうとらえられてきたかを、その重要な足跡を残した婦人解放思想と運動を考察。明六社同人の婦人解放思想、日本プロテスタントの女性観、差別と清水紫琴の移民学園、羽仁もと子の思想と生活合理化、相馬黒光、市川房枝など。

『女性解放の思想家たち』 山田 洸著 青木書店
1987年 1800円
近代日本女性史の中でも個々の思想を中心に書かれた本。近代日本はいかなる時代であり、時代を生きた先駆者たちは、いかなる問題にとりくんだのか、9人の女性たちの思想に迫る。思想の系譜として興味深い本。岸田俊子、景山英子、晶子、らいてう、菊栄、房枝、宮本百合子。永畑道子の『華の乱』と合わせて読むといいだろう。

『日本キリスト教婦人矯風会百年史』
日本キリスト教婦人矯風会編 ドメス出版
1986年 8000円
1886年に創立された日本キリスト教婦人矯風会は100周年を迎えた。この矯風会史は社会史、女性史の一端を著す資料となる。特に廃娼運動、足尾鉍毒救済、婦選運動、売春防止法などその活動の歴史がぎざぎざされている。

『女性史としての自伝』 新藤 謙 ミネルヴァ書房
1988年 2000円
自伝を通して9人の女性の生き方を描いた女性史。自伝に描かれた各自の生き方をもう一度問い直してみる。封建的な家制度、因習、男尊女卑観と闘った女性たち、らいてう、丸岡秀子、佐多稲子、福永操、石牟礼道子他。

『生きた恋した女の100年』 朝日生命広報室編
共同通信社 1988年 1800円
晶子、白蓮から美空ひばり、山口百恵など、明治21年から昭和63年まで写真でつづる女性史。

週刊朝日百科 日本の歴史 129
『女から男たちへ 自立と共生に向かって』
責任編集 天野正子・館かおる 朝日新聞社
1988年 500円
「良妻賢母」と「新しい女」、職業・女性・社会変革、市川房枝の87年などテーマ別に明治、大正、昭和をつづるグラビア雑誌。

『うたは囀—歌で綴る女性史 戦前篇』 金谷千恵子
500円
「山の動く日来る」「婦選の歌」「君死にたまふこと勿れ」など10曲、歌詞と譜面。

〔明治・大正〕

『明治女性史 全4巻』 村上信彦 理論社
1973年 各2800円
運動の頂点だけが照らされて底辺の人々の歴史の実態が見過ごされたという視点から著者はたんねんに足で調べ書きした大作。解放史から生活史へと著者の視点は、女の歴史を学ぶための新しい方法を開拓した。

- 1 上巻—文明開化
- 2 中巻前篇—女権と家
- 3 中巻後篇—女の職業
- 4 下巻—愛と解放の胎動

『大正女性史 上巻』 村上信彦 理論社
1982年 2200円
名著『明治女性史』全四巻の土台の上に大正時代の市民生活を探る。

『大正期の職業婦人』 村上信彦 ドメス出版
1983年 3300円
大正期に増加した職業婦人は女の生き方にどのような影響を与えたか? 働く女性の歴史的役割を実例により立証。村上氏の絶筆となった本。

『近代史のおんな』 村上信彦 大和書房
1980年 1400円
中島俊子, 青山光子, 清水紫琴, 相馬黒光, 伊藤野枝など近代女性史にその足跡を残した10人を描く。

『野の女—明治女性生活史』 永畑道子 新評論
1980年 1300円
庶民の女たちの生活を新聞資料から浮き彫りにする。

『炎の女—大正女性生活史』 永畑道子 新評論
1982年 1500円
自我にめざめた大正期の女たちが自立・理想・愛を求めて生きた姿を浮きぼりにする。

『青鞥の時代—平塚らいてうと新しい女たち』 堀場清子 岩波新書 1988年 530円
“ウーマン・リブ”“フェミニズム”の言葉に新しさを感ずるよう、 “青鞥の時代”のジャーナリズムにも新しいものとして『青鞥』が語られていた。家制度への反逆、自我の追求、愛と性の自由など「新しい女」たちの群像を蘇らせ、身をもって新しい時代に挑んだ彼女たちとの対話を復活させようと試みられた本。

『青鞥セレクション』 小林登美枝編 人文書院
1987年 3500円
『青鞥』アンソロジーである。編者はこの一冊を編むにあたって「いま、なぜ青鞥か」という視点の回答となる作品を選んだという。

おんなの本・フランス (連載第6回)

A-M・ド・ヴィレーヌ, L・ガヴァリニ,
M・ル・コアディク 監修

『ゆれ動く母性』—フェミニズムと母性—

2年前にマルセイユ市の女性情報センターを訪れた折、「体外授精、代理母などの人工生殖技術についてどう思うか」と尋ねてみた。ひとりのドキュメンタリストが、「多分、百年後には男も女も自分の体を通さず子供を産むようになると思う」ときっぱり言い切ったとき、私は意表をつかれ、一瞬言葉を失った。

「未来においては人工生殖のお陰で、女は“いわゆる自然な”生殖の仕事から解放されるだろう。こうして人工孵化器、つまり結局は文化を前にして、男と女(父親と母親)の平等は確固としたものになる……」
「私たちはいま1986年を生きているのであって、オーウェルの“1984年”はもはやサイエンス・フィクションではないのだ……女たちは自分たちに用意されている未来が“最上の世界”であるのかどうか問うてみなければならぬ……」と著者たちは訴える。

1970年代の女性解放運動は、女たちにとって母性が隷属であり、宿命となっていることを告発した。女が自分のからだについての自己決定権を獲得することが最優先課題であった。「そのために、“女であること”と“母であること”の間にある……女のアイデンティティのまさに中心にある矛盾、亀裂のより深く、精緻な分析は犠牲にせざるをえなかった。その結果、女性解放運動は男性モデルへの同化にしか解決の道を見出せなかったのではないだろうか。

生命科学の発展は、女たちがこの分析を行う前に、女の生殖器官を取りかえのきく機械の一部品にしてしまい、生命の価値は単なる数字となり、子どもは冷凍庫の中で消費者である両親の熱意を待ちこがれることになるのではないか。「いまこそ、女たちが個人的、私的レベルでも、社会、文化、象徴レベルでも……」

なかじま さとこ
中嶋 公子
(日仏女性資料センター)



女なるもの/母なるものという人間の根源的かつ豊饒な両義性を分析、概念化し、差異を考慮する新しい社会論理を作るべきときではないだろうか。これが本書の執筆者たち、作家、研究者、助産婦などから成る「フェミニズムと母性」研究会の11名のメンバーに共通する問題意識である。

では、長い間闇の中に置かれたこの「暗黒大陸」にどのように照明を当てていけばよいのか。母性に関するフランスの女性解放運動の理論的穴を埋めようと試みる「フェミニズムと母性」、自らの体験を通して苦しげに探究される「母娘関係」、家父長制社会の男の言説を批判し、母なるものを考察する「母性と父性」、再生産と生産の関係を分析する「子どもと仕事」、出産が臨床医療行為となった現実を問う「医学、母性、フェミニズム」、生殖技術の発展と母性の関係を批判的に検討する「展望」とさまざまな角度から光は順番に当てられていく。このように総合的な母性の考察ははじめての試みなのではないか。なによりも本書の優れている点は、家父長制社会によって沈黙させられてきた自らの実感、経験を通して、その理論化をはかろうと苦闘する執筆者たちの意志にあると思う。実感に疑問符を付けつつ概念化するという困難な作業に挑戦する彼女たちに心からの共感を覚える。

“Maternité mouvement” Sous la direction de A.-M. de Vilaine, L. Gavarini, M. Le Coadic. SAINT-MARTN. 1986. (勁草書房より刊行予定)

第一回の菊地有子さんの紹介による『母親の歴史』は筑摩書房から刊行予定。今回で「おんなの本・フランス」は終わります。次回から秋山洋子さんによる『おんなの本・中国』がはじまります。

『女のくせに—草分けの女性新聞記者たち』 江刺昭子
文化出版局 1985年 1300円
明治から大正にかけてのジャーナリズムの草分け時代に新聞記者に挑戦した女たちの軌跡をたどる。現在でも女性記者の比率は1.05%と少数派。1890年に国民新聞に入社した最初の女性記者、子連れ取材をした磯村春子、ペンに命をかけた菅野すが、記者から運動家へ転進していった市川房枝など。性差別のきびしかった時代に情熱と行動力と叡知をもって行動した女性ジャーナリストたち。

『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』 山崎朋子
文春文庫 1975年 380円
天草で赤貧の老後を送る“元からゆきさん”の生活に自ら飛びこみ、生の声を聞き書き。

『女と家—日本女性史入門講座①』 吉見周子編著
同成社 1988年 1800円
新憲法発令とともに「家制度」は廃止された。しかし、未だに男女ともに「家」が抜きさしならない重みをもつ。なぜ「家」がそれほどまでに個人を規制するのか、本書は「家」と「女性」の歴史を考察した興味深いテーマをあつかった女性史。古代家族の中の女、道具にされた江戸時代の女、日本の近代化と女性他。

〔昭和〕

『おんなの昭和史—平和な明日を求めて』
永原和子、米田佐代子 有斐閣選書 1986年 1400円
昭和の幕明けは大正デモクラシーの時代には遠い存在であった天皇を女子教育界の主な人々が叙勲を受けることで近づけ、大正から昭和の改元の節目はスタートしたととらえている。現在の日本の状況をみても、この本の視点は大切であろう。軍国主義の魔手につかまり、戦後の一億総ザンゲへとしかけられていくことはもうゴメンだこの昭和史は語る。ぜひ多くの女性に読んでほしい一冊。

『写真集 女たちの昭和史』 大月書店 1985年 2500円
激動の昭和を生きてきた女性の足跡を写真でたどる、目でみる女性史。

『昭和史のおんな』 澤地久枝 文春文庫
1984年 360円
東郷青児の妻たち。墮胎罪に問われた女優志賀暁子。杉本良吉の妻杉山智恵子など、昭和史を生にぬいた女たちの足跡をたどる。

『続 昭和史のおんな』 澤地久枝 文春文庫
1986年 440円
昭和に生きた女性たちのドラマ。初代女性アナ翠川秋子の情死、伝説のなかのプリマドンナー関屋敏子他。

『婦人雑誌からみた1930年代』
私たちの歴史を綴る会編著 同時代社 1987年 1600円
昭和5年から15年におたる「1930年代」は「暗黒の時代」への転換期であった。当時広く読まれていた『婦人公論』『主婦の友』『婦人倶楽部』の3誌を選び、その目次と内容を検討し、歴史の推移と大きくかわりあいながら女性の感性に訴え戦争協力者へとかりたてるジャーナリズムの一端を明らかにしている。

『占領下の日本婦人政策—その歴史と証言』
西 清子編著 ドメス出版 1985年 1800円
生前、市川房枝が調査研究の構想をねっていた事業計画が、本書となって完成。“占領政策には功罪ともにあるが、こと婦人問題に関しては民主化への実現という点で評価される”(市川房枝)。今日の日本の婦人の地位と戦後民主主義の原点が記録にとどめられている。GHQ 関係者の証言など戦後資料として貴重な本。

『占領日記—草の根の女たち』 カルメン・ジョンソン
池川順子訳 ドメス出版 1986年 1600円
占領政策が地方でどのように実施、展開されたかを知る上で、貴重な本。地方(四国)軍政部の婦人要員として来日した著者が当時のメモに基づいて本書を構成。特に著者は婦人政策における女性の地位の平等を主張して四国を駆けまわった。

『女の戦後史 I, II, III』 朝日ジャーナル編
朝日新聞社 1984~1985年 各1200円
昭和20年代から50年代まで女性の当面する問題をテーマごとに検証したユニークな女性史。引揚げ、婦人参政権からウーマンリブ、山口百恵、おしん等そのときどきの話題をテーマとする編集企画のおもしろい女性史。

『パラシュートと母系制—回想のわが戦後史』
田中寿美子 ドメス出版 1986年 1500円
占領下の変革の中で、社会の表面に出て働く女性となった著者の戦後史。アメリカ留学、労働省婦人少年局、議員生活など。

『覚書 戦後の市川房枝』 児玉勝子編 新宿書房
1985年 2200円
未完のまま逝った市川房枝の自伝戦後編。理想選挙の灯をともしつづけた市川房枝の戦後の軌跡。これはひとりの女性の戦後史であるとともに政治史でもある。

『女たちは書いてきた—「ひととき」に見る現代女性史』
奥田暁子編著 径書房 1986年 1800円
1952年に主婦という肩書きがついた投稿が朝日新聞に掲載された。それ以後の30年間の投稿欄「ひととき」を分析した興味深い戦後女性史。夫を語る妻たちの30年、子どもと母親、女性と老後、安保、高度成長期、女の時代の始まり等、50年代、60年代、70年代において「アクセスの会」(ふつうの女の解放と自立を求める会)のメンバーが共同執筆したもの。

『現代日本女性史』 井上 清 三一書房
1962年 550円
戦後、自らの社会的・文化的地位を高め、平和と民主主義を守る闘いに大きな役割をはたした日本女性像をとらえた現代女性史。名著「日本女性史」の姉妹編。

『あごろ33号 新聞切り抜きに見る女の16年—リブの台頭 1970~1972』 あごろ編集会議編 BOC 出版部
1987年 1800円

『女の気持ち』30年 全5巻』

毎日新聞大阪本社学芸部編 新評論
1987年 各巻1200円

1954年に生まれた投稿欄「女の気持ち」。暮らしの中で感じた、考えた女性の戦後史として面白い本。時代の流れを本書の中に読みとることができる。テーマごとに年代順に配列され、下欄には関連年表と写真もあり、ていねいな編集。

- ① 嫁姑—老年
- ② 子ども—教育
- ③ 自然—暮らし
- ④ 女性—自立
- ⑤ 戦争—平和

『朝鮮戦争逆コースのなかの女たち—銃後史ノート戦後篇①1949・1～1951・7』

女たちの現在を問う会編
インパクト出版会 1986年 1500円

「銃後の女たち」の加害性を執拗においつづけてきた同会が戦後篇を発売。朝鮮戦争を境にしてまた逆コースをたどりだした女性の状況を豊富な資料や聞き書きによって明らかにしている。革新婦人団体の分裂、体制によって指導される地域婦人会の組織化等民主主義の名のもとにはじまった女性の戦後の社会参加の功罪を問う。

『く日本独立』と女たち—銃後史ノート戦後篇②1951・8～1953・6』

女たちの現在を問う会編
インパクト出版会 1987年 1500円

1952年4月28日に日本は「独立」した。中国を入れずの単独講和。そして安保体制へとなだれこんでいく。女たちにとって「独立」とは？ 占領下に打ち出された「民主化」政策がつぎつぎに骨抜きにされていた。

『55年体制成立と女たち—銃後史ノート戦後篇③1953・7～1955・12』

女たちの現在を問う会編
インパクト出版会 1987年 1500円

「55年体制」の内実は重い。既刊「逆コース」単独講和による「独立」をすでに出版した銃後史戦後篇は現在にいたる骨格をつくりあげた「55年体制」—保守合同が成立していった過程を追う。あこがれの電化生活、主婦論争、第一回母親大会など貴重な女性資料がつまっている。

『もはや戦後ではない？—銃後史ノート戦後篇④1956・1～1958・12』

女たちの現在を問う会編
インパクト出版会 1988年12月 1500円

戦争被害の払拭とあらたな経済成長の時代の幕開けを告げる言葉として「もはや戦争ではない」は人々の間に浸透していった。座談会「勤評と闘って」、売春防止法と赤線の女たち、「緊急声明・「昭和」の終わりにあたって」他。

『戦後女子労働史論』

竹中恵美子 有斐閣
1989年1月 7000円

本号最新刊案内8頁を参照下さい。

【戦争と女性】

『女性と天皇制』

加納実紀代編 思想の科学社
1979年 1700円

女と戦争の問題を考える上で、多くの手がかりを得ることができる本。世代も育った環境も異なった18人の女性が、日常生活の視点から天皇制を論じる。特に編者加納実紀代の“大御心と母心”と題された論文は光っている。天皇制を無化するためには共同幻想を壊さなくてはならない。まず母たち自身が正直であらねばならない。あの15年戦争において天皇と母たちは大御心と母心の虚構とともに支え合ったという点において、共犯者であるといわざるを得ない。民衆に天皇の戦争責任を追求できるはずはなかった。民衆はその痛みを回避して一億総ザンゲの共同性に逃げこんだと論じる。力作多数掲載。

『女たちの〈銃後〉』

加納実紀代 筑摩書房
1987年 1500円

15年戦争の〈銃後〉を執拗に追いつづけてきた『銃後史ノート』の編者でもある加納実紀代の評論集。序章「私の〈原爆の図〉」に著者の15年戦争に対する加害と被害意識の原点をみる。「戦争という怪物は決して最初からむきだしの戦争の顔してはやって来ない」といまに警鐘をならす好著。エロ・グロ・ナンセンスから白いかっぱう着（国防婦人会）へと総動員されていく本書に書かれた1930年代をしっかりと学びたい。歴史の誤りをくり返さないためにも。

『フェミニズムと戦争—婦人運動家の戦争協力』

鈴木裕子 マルジュ社 1986年 1500円

婦人指導者といわれた女性たちの戦争協力と〈翼賛〉を検証する。権力から疎外されていた女性は、権力への接近を女性解放、社会参加と見誤り、戦争協力へと組みこまれていった。本書は加害者意識がスッポリと抜け落ちた女性たちの戦争協力を戦後世代の視点で鋭く撃っている。

『戦争と女たち』青木やよひ編 オリジン出版センター

1982年 1500円

女と戦争のかかわり、問題点があらゆる視点から論じられ、今、現在私たちは反戦・平和を守るためどうすればいいかを考え、行動する手がかりとなる本である。多彩な執筆者落合恵子・鶴見和子・樋口恵子・丸岡秀子。かつて女はどのようにして戦争に組み込まれたか。座談会—いま、戦争反対をどう実践するか。女の戦後—共に生きる道を求めて他。

『戦争を生きた女たち—証言・国防婦人会』梶谷美規子

ミネルヴァ書房 1985年 1700円

『国防婦人会一日の丸とカッポウ着』

藤井忠俊
岩波新書 1985年 480円

『女にとっての戦争1・2—「ひととき欄」の30年から』

中村智子・影山三郎 草の実会編 田畑書店

1982年 各1500円

朝日新聞「ひととき欄」の30年間の中から、戦争を主題とした330篇を選んで年代別に構成。日常の生活の場から戦争と平和を語りつづけた女性たちの戦後の歩みを追う。

『横浜事件—妻と妹の手記』 小野 貞 気賀すみ子
高文研 1987年 1200円
戦時下、『改造』の編集者の夫を連れ去られ、『中央公論』の編集者だった兄を獄死させられた妹の手記。史上最悪の言論弾圧事件を証言する貴重な記録。

『囚われの女たち 全10巻』 山代 巴 径書房
1980年～1985年 各1500円
1942年から1944年3月まで治安維持法違反幫助罪で投獄され、囚人どうしの連帯だけを頼りに生きのびた著者の体験を小説化。女囚刑務所へ送られた吉野光子は囚われの仲間の中に生きる。

『銃後史ノート No. 1～No. 3 合冊号』 JCA 出版
1977年 1500円
生き残った銃後の女たちと戦争を知らないメンバーたちの対話の場としてこの機関誌を発行。銃後の母たちは戦争の被害者であったが、同時に侵略戦争を支える銃後の女であった。

『銃後史ノート No. 4』 1982年 1200円
特集 非常時の女たち

『銃後史ノート No. 5』 1982年 1200円
特集 日中開戦・総動員体制下の女たち

『銃後史ノート No. 6』 1982年 1200円
特集 紀元二千六百年(昭和15年)の女たち

『銃後史ノート No. 8』 1983年 1600円
特集 戦場化する銃後—空襲・疎開・勤労動員

〔地方女性史〕

『北の女性史』 札幌女性史研究会編 北海道新聞社
1986年 1500円
幕末、開拓時代、遊廓、教育、労働運動、文学など多分野から書かれた北海道女性史。資料編、巻末年表は貴重な女性史研究の資料となろう。

『夜明けの航跡—かながわ近代の女たち』
神奈川県立総合センター かながわ女性史編集委員会編
ドメス出版 1987年 3300円
婦人総合センターが4年がかりですすめてきた地方女性史。県下のお年寄りからの聞き書、豊富な資料調査による300頁の大版の女性史は県の貴重な記録となろう。近代の夜明けの重要な舞台となった神奈川の女性たちは進取の気性に富んでいた。

『静岡おんな百年 上』 市原正恵 ドメス出版
1982年 1400円
静岡地方女性史。自由民権と女たち、吉岡弥生—女医の先達の少女時代。明治社会主義と女たち。

『静岡おんな百年 下』 市原正恵 ドメス出版
1982年 1400円
キリスト教に生きる—宮城まり子の母 戦前社会運動群像 戦後の女たち—藤原道子 静岡県近代女性史年表。

『戦後信州女性史』 長野県連合婦人会・辻村輝雄
家政教育社 1978年 2800円
長野県下の婦人会が戦後20年間にわたる婦人の生活・活動の実態を昭和41年に非売品として発行。それを復刊出版したもの。空しい戦争の果てに、苛酷な戦後生活、婦人参政権と政治、PTAと母親他。

『ヒロシマの女たち』 ドメス出版 広島女性史研究会
1987年 1600円
広島女性史研究会(広島市西区斐太迫2-31-6)の『山陽路の女たち』(ドメス出版)につづく第二作。被爆地「ヒロシマ」に生きる19人の女性と4団体を紹介。折鶴の会、デルタ・女の会、笹森恵子、栗原貞子などヒロシマの足跡を。

『高知県婦人解放運動史』 外崎光広 ドメス出版
1975年 2500円
婦人解放運動の先駆地、高知県に視点を据えた、1世紀に及ぶ婦人解放運動史。

『ふるさとの女たち—大分近代女性史序説』 古庄ゆき子
ドメス出版 1975年 1300円

『写婚妻』 工藤美代子 ドメス出版 1983年 1300円
70年前1枚の見合い写真を手にカナダに渡った写婚妻をたずね、13人にインタビュー。カナダ在住の著者の隠れたカナダの移住女性史。

〔資料・その他〕

『日本女性史総合研究文献目録Ⅰ』 女性史総合研究会編
東京大学出版会 1983年 5500円
『日本女性史』(東京大学出版会)の執筆者が研究文献を目録化。女性史研究に必要な新しい情報が各項目ごとに網羅されていて、有効な本ではあるが、編集方法にも少し工夫がほしい。少々読みづらい。

『日本女性史総合研究文献目録Ⅱ』 女性史総合研究会編
東京大学出版会 1989年1月 5000円
1982年～1986年に発表された女性史研究文献を収録。Ⅰでは明治以後の研究文献で一冊であったがⅡでは5年間の文献だけで一冊になった。通史、考古～現代、民族など8項目に分類された女性史研究の目録。

『女たちの自分史ノート』 女たちの自分史を考える会編
松香堂書店 1987年 3000円
ほかでもない自分のための記録。綴ることは自分を客観視するための有効な作業。明治から昭和の女性史年表。出版ジャーナリズム史も付いていて便利。書くためのマニュアル付き。台紙はピンクとブルーの2色あり。色をご指定下さい。

—女性のための—

最新刊案内



—1988年11月～
1989年1月及び
第29号未掲載分—

〔性・からだ・心理〕

『母性 ころろ・からだ・社会』

繁多 進, 大日向雅美編 新曜社 1988年12月 2500円
新しい時代に生きる女性たちの生活に即した「母性」の構築が急がれる。本書は医学・心理学・社会学・社会福祉・歴史学などの分野から「母性」観の現状と問題点を指摘。十代にみる「性」と「生」、子育ての中の母親の心理、共働き家庭における子育ての条件、母性はどこへ行くか他。

『のびのび更年期—メノボウズ・ナチュラルー』

サジャ グリーンウッド 加地永都子, 根岸悦子
径書房 1988年11月 1400円
メノボウズとは英語で閉経という意味。本書は中年期を健康に過ごすための自分のからだと上手につきあうアドバイスにあふれた本。年はとるもの、更年期の出血、ほてりとその対処のしかた、第二の人生とセックス、骨を強くしておくこと—骨粗鬆症を防ぐ、栄養—何をたべ、何を飲めばよい他。

『ボディー・ワークのすすめ—からだと自己発見』

グラバア俊子 創元社 1988年11月 1300円
からだに対する意識を明確にすることは種々の偏見から自分を自由にするための一つの道である。対人間コミュニケーションにおける非言語的表出としてのボディーランゲージについて、「自己の象徴としてのからだ」とは何か、からだの状態に対して敏感になるための解説・実践の書。

『30歳からの妊娠・出産・子育て—高年出産なんかこわくない』

石原 力 入門島美監修
竹内政夫, 深江誠子他著 婦人生活社
1988年12月 1500円
〈30歳からの妊娠出産の心配・気がかりなことにお答えします〉〈30歳だから美しくはつらつマタニティ生活をすごしましょう〉〈30歳からのお産体験的アドバイス〉〈働く女性が知っておきたい法律や制度〉他。

『エロスなき母子癒着の病理—大人になれない青年たち』 山田和夫 大和出版 1988年8月 1300円
母子癒着の構図—エロスを欠いた「母」の過剰な取り込み、母にゆとりの必要性、「父」不在が引き起こす家庭崩壊、母のようになりたくない—思春期やせ症の原因、家族の「業」を一身に具現した三島由起夫—祖母の「いけにえ」としてスタートした生 など興味深い精神科医の著書。

〔女性史・評伝〕

『日本女性史研究文献目録Ⅱ』 女性史総合研究会編
東京大学出版会 1989年1月 5000円
本号特集目録6頁に既出。

『もはや戦後ではない—銃後史ノート戦後篇④1956・1～1958・12』 女たちの現在を問う会 インパクト出版会
1988年12月 1500円
本号特集目録5頁に既出。

『シリーズ 家族史④ 家と女性—役割』

比較家族史学会監修 石川栄吉, 峰岸純夫他編 三省堂
1989年1月 2400円
シンポジウム「家と女性」、文化人類学における性差研究、日本近代家族法と女性、「家と女性」に関する文献目録他。

『黒髪文化史』

大原梨恵子 築地書館
1988年11月 4700円
奈良時代から明治まで各時代の男女の髪形の変遷史。

『西洋のヘア・ファッション』 ポーラ文化研究所編

石山 彰監修 1988年10月 1500円
西洋のヘア・ファッションに関する欧文の文献解題と目録。ヘア、化粧、コスチューム編に分類されている。

『聖母と娼婦を超えて—ブレヒトと女たちの共生』

谷川道子 花伝社 1988年10月 3500円
ブレヒトには「一夫多妻的傾向」があった。「一夫一婦制の市民社会的モラル」から自由であったといいかえてもいいかもしれない。ブレヒトの生には実に多くの女性が立現われた。ブレヒトと女たちの共生が提起する問題—一男と女の友愛をさぐる。

〔女性論・フェミニズム〕

『母性の研究—その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証』 大日向雅美 川島書店 1988年6月 3800円
本書の母性研究は従来の母性信仰への懐疑を出発点としている。新しい親子関係や父性の問題まで視座に入れた画期的な母性研究の論文を多数収録。第一部 日本における伝統的母性観とその問題点、第二部 母性の発達変容に関する研究報告、母親意識の世代差について、母親の子どもに対する愛着、第三部 父性をめぐる現状とその問題点、わが国における父権の特質および問題点他。

『生殖神話が崩れる—フェミニズム社会生物学入門』

エヴェリン・ショー, ジョーン・ダーリング
田中和子, 三木草子訳 有斐閣 1989年2月 1600円
人間以外の種のメスの生殖戦略について述べた興味深い本。動物王国の解放されたメス。オスを得るさまざまな方法を駆使するメスたち。〈なぜ人間の女性は発情期を喪失したのか〉が面白い。生物学的視点から人間の性別分業の固定観念を解き放ってくれる。

『女と文明』 梅棹忠夫 中央公論(中公叢書)
1988年11月 1300円

1950～60年代に梅棹氏が書いた女性論、家庭論を収録。有名な「妻無用論」や「母という名のきり札」はいま再読してみてもインパクトがある。他に家事整理学、情報産業社会と女性など卓越した先見の明がある論文が多い。

『アカデミック・ウーマン—女性学者の社会学』

加野芳正 東信堂 1988年10月 2000円
本書でアカデミック・ウーマンとは大学で教育・研究に携わる女性のことを指している。学問の世界における女性参加の実態と実証的研究の書。何が女性の学問生産を阻害するのか? その現状と歴史の変動、欧米の女性と学問等、男女間の差を社会的問題意識で捉える。

〔家族・パートナーシップ〕

『妻たちの企業戦争』 木下律子 現代教養文庫
1988年12月 480円

長らく絶版になっていた『王国の妻たち—企業城下町にて』(径書房)が文庫本として再登場。企業戦士の夫とその家族である妻たちの関係をルポ。日本の企業の実態と夫の「会社」に縛られてしまう妻たちが浮かびあがってくる。

『「既婚シングル」の時代—新しい夫婦像を探る』

近藤 裕 PHP 研究所 1988年12月 1200円
日本の夫婦の大半は既婚シングルではなかろうか? 結婚したものの夫と妻は“別の世界”に住む。夫婦間の心の距離について考え、建設的な既婚シングル像を模索する。

『伴侶に先立たれた時』 A・デーケン 重兼芳子編
春秋社 1988年11月 1300円

「配偶者の死」は老年期のとりわけ老年期の女性の問題である。80%以上の女性たちがいずれ配偶者の死を経験する。また死別以前に夫婦仲のよかった人々のその打撃は当然のことながら大きい。老年学、精神医学、社会心理学、哲学の立場から、また経験者の立場から死別のときにそなえる生と死を考えるセミナー特集。

『母娘の風景』 松本侑壬子 論創社
1988年12月 1500円

母娘のテーマが気になりだしたのは女性映画「ドイツ・青ざめた母」を観てからである。著者はいう。著者(共同通信記者)の気になる母と娘にインタビュー。桐島洋子&かれん、吉行あぐり&吉行和子、加藤シズエ&タキ、津島佑子、高野悦子、伊藤ルイ、丸岡洋子が語る母と娘のこと。

『まるごと一冊結婚の本』

女性のための編集者学校出版局 ブロンズ新社
1988年11月 1200円
1兆4000億円といわれるわが国のプライダル産業。様々なセレモニーを生み出し、雑誌の定番テーマは「結婚」。本書は女性編集者の卵たちが自分たちらしい「結婚」に関する雑誌をつくった。世の雑誌とは一味ちがった読みごたえのある本。対談・ああ、結婚という名のバラエティショウ、世界の結婚 1038人のアンケート〔わたしの結婚ばくの結婚〕プライダル業界ク物語他。

『講座 家族心理 全6巻』 金子書房
1988年 各巻3500円

- ① 変貌する家族—その現実と未来
家族をめぐる社会、歴史的諸態様の検討
- ② 夫と妻—その親密化と破綻
離婚、セックス、セラピー
- ③ 親と子—その発達と病理
登校拒否、家庭内暴力
- ④ 家族と社会
共働き、単身赴任
- ⑤ 生と死と家族
- ⑥ 家族心理学の理論と実際

『解体家族 改訂版』 小室加代子 批評社
1989年1月 1600円

日本版「クレーマー・クレーマー」。父子家庭と母子家庭、脱家族化に人々はどう生きるか。

〔経済・くらし〕

『戦後女子労働史論』 竹中恵美子 有斐閣
1989年1月 7000円

戦後の女子労働問題の諸論文を一冊にまとめた大作。I. 現段階の女子労働論争、特に家事労働をめぐる問題、II. 戦後日本の労働事情と女子労働—雇用、賃金、女子労働の再編等。

『働く女性の子育て論』 田中喜美子 新潮選書
1988年11月 780円

少々題名に異和感があるが、ぜひ読んでおきたい子育て論。現代社会は女性が子どもを産むことによって大きく損をする社会である。子育てを正常な軌道に乗せようとするなら、母親を社会的に支えることが必要である。母親を子どもとともに家庭に閉じこめる現在の構造を改めなければならない、子どもを通じての自己実現の道ではなく、自分自身を十全に生かす道を母親に与えるべきだ。そして、いま父親に望みたいことは、何よりも男としてその妻を支えてほしい、夫として妻と正面から向き合っしてほしい。本書の子育て論は女性論でもある。

『女性のライフサイクル—所得保証の日米比較』
マーサ・N・オガワ 木村尚三郎他編 東京大学出版会
1989年1月 4600円

女性のライフサイクルの過程における所得維持の問題にアプローチした日米比較。女性と教育、女性労働の変化、離婚と所得保障、老人介護、10代の出産・妊娠、他。

『共働きの子育て読本』 嶋原洋子 PHP 研究所
1989年1月 980円

「働く」「育てる」「遊ぶ」をテーマに仕事もしたい、子どももほしい女性たちに先輩からのアドバイスとメッセージ。

『生活文化大変革—女が変わる、男を変える』大橋照枝
学習研究社 1988年11月 1200円

自分を大切に生きていきたいホロン型人間こそこれから会社の将来を託せる未来派人間。“家のことには口出ししない”なんてイキがっていると会社でイキが詰まってくる。女性を雑用便利社員と思っている会社はもう長いことはないなど男女共生時代のビジネス戦略を考える。

『ビジネスマンの父より娘への25通の手紙』
キングスレイ・ウォード 城山三郎訳 新潮社
1988年 1400円

『わたしの仕事えらび—かしこい女性のための再就職ガイド』

芹沢茂登子+松尾道子 労働旬報社

1988年12月 1200円

資格をとって自分の特技を生かした再就職の実例15, 情報収集の方法, 再就職のための法律ノウハウ他。

『花森安治の仕事』

酒井 寛 朝日新聞社

1988年11月 1600円

「暮し」という言葉及びその内容に市民権が与えられたのは『暮しの手帖』におうところが大きい。その中心的存在であり日本の雑誌出版史にその功績を残した花森安治の仕事を書本は明らかにしてくれる。戦後すぐの明るい開放的だった私たちの母たちの時代がよみがえってくる。

『彩布にまみれて—手染工房うき草』

金田美智子

横原 瞳編著 プレーンセンター 1988年12月 1400円

岡山の津山市で手染工房を営む二人の元気のいいメッセージ。流行やブランドに振り回されたくない自分らしい色を出す「うき草」の染め。

『はりの響が伝わりますか—延安治療所物語』

博多・延安治療所編 プレーンセンター

1988年7月 1400円

患者さんの治癒力を引き出すのがこの仕事。11年の歴史をもち、日本初のはり灸企業組合(ワーカーズ・コレクティブ)として活動している4人の女性たちの仕事場からのメッセージ。

『サヨナラ原発ガイドブック—まだ、まにあうから』

有紀恵美 青弓社 1988年10月 500円

とてもユーモアにあふれた原発運動のための冊子。暮らしの特効薬「原発散」の効能がきにはじまり、ひとりではじめられる原発運動のマニュアル。そして、「夫対策」なるマニュアルまである。原発をめぐした女性たちが夫問題に苦慮している。夫のことで悩まず原発でできる人はごく少数という。巻末にはブックリストがある。

『HELP からみた日本』

大島静子+キャロリン・フランシス 朝日新聞社

1988年12月 1300円

日本キリスト教婦人矯風会がアジアの女性たちのために開いた、かけこみセンター HELP に逃げてきたアジアの女性たちの話と HELP の活動について。日本人女性を含むアジアの女性たちの避難場所 HELP からみた日本とはどんな国か? 不法就労の彼女たちの人権問題など今日の日本の労働問題に問題提起している。

『在日』外国人』

江崎泰子 森口秀志編 晶文社

1988年11月 2800円

インタビュー本では定評のある晶文社の最新刊。35カ国100人が語る「日本と私」。私たちにとても外国人たちとともにいることがもっとあたり前になるといい、そして、私たちは新しい“隣人”についてももっと知ることが必要であろう。地理にも精神的にも鎖国日本の開放のために。

『ツイナーたちのニューヨーク』

多賀幹子

時事通信社 1988年12月 1200円

ツイナーとは tweener (中間の人・普通の人) という意味。アメリカで1988年の初めごろから言われるようになった。アメリカはブラック・マンデーを経てヤッピーの時代からツイナーの時代に移りはじめたという。シンプルな生活と強まる家族の絆。心の充足を求めてサクセスストーリーよりも中ぐらいで満足しようとする堅実なもうひとつのアメリカ人たちのライフスタイルをレポート。

『若いやつは失礼』

小林道雄 岩波ジュニア新書

1988年8月 580円

このごろ「うらやましい」と感じさせるような若者の姿がみられなくなった。テレンテレンという感じで歩いている姿ばかり目につく。シャキッと決めたらどうかい、アタッシュケースに「少年マガジン」、まともな日本語もしゃべれず「かわいい」と「清潔」という価値基準しか持たない若い女性たち。クラいと思われたらおしまいだと議論ゼロの若者の価値観に辛口異論をさしはさむユニークな新書。

『暮らしの商品安全学』

宮本一子 筑摩書房

1988年12月 1200円

商品に囲まれた日常生活の中には危険がいっぱい。商品安全対策担当員の商品学ノート。

『アジアから来た花嫁—迎える側の論理』

宿谷京子

明石書店 1988年12月 1600円

土地や農業の世襲制にからめとられた農村青年とそれを取りつろうためのアジアの女性との国際結婚を女性の視点からルポ。

〔男性問題〕

『父子家庭を生きる—男と親の間』

春日キスヨ

勁草書房 1989年1月 1700円

女性の助けがあってはじめて「親」になれる性。父子家庭の男性は「男親には子育ては無理」という常識との闘いと“男のつきあい”の群れからはずれる孤独感。「仕事こそ男の世界」と信じている日本の男性に警鐘をならす意欲作。

『父親40歳からの出発』

菅 龍一 ダイヤモンド社

1988年10月 1200円

高度成長の荷い手であった実年・壮年期の男性たち。妻や子を養うために宮々と働いてきた。私たちは充分すぎるぐらい働いた。いま子どもたちも巣立とうとしている。これからは職場や家庭の外に目を向けて自分の居場所を再確立しようではないか。著者の経験した苦しみから新しい自己を創造しようとするもう一つの「男性の自立論」

『父親時代』

ビル・コスビー 加藤風美訳

KK ダイナミックセラーズ 1988年11月 1000円

子どもたちへの鋭い洞察力、ユーモア、豊かな愛情の書。コスビーはいま全米で人気No.1のタレントで教育学博士。5人の子の父親として彼の語る子どもたちの話はしっかりと父親役割をはたしている男性の子育て論として読むことができる。

『おじさん改造講座』

OL 500人委員会

清水ちなみ 古屋よし ネスコ(文芸春秋発売)

1989年1月 1000円

『週刊文春』で好評連載のOLたちがオジさんに鋭くせまる苦言、異論集。OLたちとオジさんたちの深いミゾはこれでもうまりそうにもない。この本は逆にオジさんたちのOL操縦術としてもよめます。

〔エッセイ・その他〕

『ぼちぼち草子』 田辺聖子 岩波書店
1988年10月 1300円
『世界』に連載されたエッセイを収録。「気ばらんとまあぼちぼちにいきまひょか」これは、おせいさんが好んで色紙に書く言葉だが、こと女性に関する問題は「ぼちぼち」やっていたら遅れをとるといふ。「女の定説」が片端から崩れはじめていふ。男性たちの発言や発想が女に関する部分から古くなる。女・男・子どもなどを語る辛口エッセイ。

『父と娘の歳月』 寿岳文章, 寿岳章子 人文書院
1988年12月 1700円
話しあいこそ家庭のいのち。学者の家に生きる父と娘の対談。「ことばがたがいの人生をつなぎ、ことばが家庭の中に深さを作る」と語る良質の親子の対話。

『神はナイルに死す』 ナワル・エル・サーダウィ
鳥居千代香訳 三一書房 1988年12月 1300円
『0度の女』につづくエジプトの作家サーダウィの小説邦訳第2弾。貧困と無知と不幸による逃げ場のない状態に置かれたザケヤはついに村長を殺した。宗教は権力と結びつき村長が神を偽って村人を支配する。すべての宗教は男性がつくった。「アラールはここにはいない。私がアラールをナイル川の土手に埋めてしまった」と女囚ザケヤがいう。神はナイルに死す。

『レット・イット・ビー』 若桑みどり 主婦の友社
1988年11月 1400円
『女性画家列伝』(岩波新書)を著者のエッセイ。日本でも数少ない美術史研究者がわが国の権威主義・男性主義に対して異議を申し出て、自分の志を語る迫力のあるエッセイ。

『主婦を魅する新宗教』 いのうえ せつこ 谷沢書房
1988年9月 2500円
いま宗教に高い関心をもっているのは30代主婦という報告がある。本書は新家族に入信する女性をルポ。新宗教ブームと女性の関係をさぐる異色作。「夫にしたがう」ことを求めるこれらの宗教は「女性の自立」から大きく離れている。規範を求める主婦たち、水子供養に走る主婦パワー、神にすがって安心なの、女性解放運動が落ちてきたもの他。

『シングル感覚—新しい女たちの選択』 青木やよひ
廣済堂出版 1989年2月 1200円
著者が主張する“シングル感覚”とは人生は一回かぎりの自分のもの。そして自立と連帯はどちらが欠けても息苦しい。いまの自分を愛せるように願いをこめた生き方エッセイ。

『女性のスポーツ事典』 三省堂 1989年1月 1000円
女性のためのスポーツとからだ・病気、からだ SOS、スポーツとウェア、コンディション、女性のスポーツ種目、スポーツ女性名鑑、スポーツ団体一覧。

〔雑誌・資料〕

本の雑誌 1989・2月号「特集 女が読むべし本、女たちにすすめたい本」本の雑誌社 1989年2月 400円
女性雑誌の欲望のベクトルを読む・中野翠、無欲の人へ〈再読吉本ばなな・山田詠美〉座談会・男性作家の描く女はもうたくさんだ他、興味深い特集。特に中野翠の女性雑誌の分析は鋭く面白い。

現代思想 Vol. 17「特集 器官なきセックス」
青土社 1989年1月 980円
パタイユの美女殺し(山田登世子)商品は女性名詞(金塚貞文)対談メディア・セックスのエクスタシー(伊藤俊治+植島啓司)

法セミ 2月号「特集 新しい家族と家族法」
日本評論社 1989年1月 750円
家族の変化が家族法に影響を与えている。家族法の新論点8講—法律婚のゆくえ、夫婦と性、離婚と親子関係、国際結婚と法、他。

法学セミナー増刊 42「外国人労働者と人権」
日本評論社 1988年12月 1500円
アジアから来る人々のいま一売買されるアジアの女たち、農村の国際結婚のかけにあるもの、外国人労働者と労働法、ジャバゆき問題とフィリピン社会。

女子教育もんだい No. 37 季刊=秋「特集 子どもの人権・思春期の抵抗」
労働教育センター
1988年11月 880円
エッセイ 10代の抵抗・私と思春期。私のフェミニズム論・産業社会とフェミニズム(藤井治枝)

別冊宝島 87「ファッション狂騒曲」 JICC 出版局
1989年1月 980円

現代のエスプリ 260「新男類の誕生」 編集上野千鶴子
至文堂 1989年2月 990円
シンポジウム/新男類の誕生、地域とかかわる新男類、婚姻届を出さない新男類、ポストファミリーの新男類たち他。

actes (アクト) No. 5「特集 男と女の関係学」
日本エディタースクール出版部 1988年12月 1600円
性的差異とのディスカール・リュス・イリガライ論。女性の文化と権力、漱石の「姦通小説」他。

『日本の人口・日本の家族』 人口問題審議会
厚生省大臣官房政策課編 厚生省人口問題研究所
東洋経済新報社 1988年12月 1500円
『人口白書』家庭版。人口変動と家族、結婚パターンの変化と要因、子供数の変化と要因、夫婦関係の変化と要因、世代間関係の変化と要因、地域社会と家族、欧米諸国における家族の変化。

月刊 女性 パド・ウイメンズオフィス 各2000円
11月号 変わる結婚事情 女のメディアをつくる
12月号 世界は今、女性の時代 パート労働 派遣労働
1月号 '88 女性事情 性犯罪と立ちあがる女性たち

《あなたの情報・私の情報》

日本の再就職制度を考えるために是非一読を!

フランスにおける

女性のための再就職教育の調査と研究

——我が国における再就職教育の実現をめざして——

1986年度「女性のためのエッソ研究奨励制度」対象調査

寺田 恕子 著

人生80年と言われる時代、子育てが一段落した後再び働き始める主婦が増えている。しかし、主婦たちを迎える社会の受け皿は貧しく、一方彼女たちの就労意識に問題がないわけではない。

フランスでいち早くこの問題に気づき、自ら「ルトラヴィエ」という女性の再就職教育センターを1973年に創設したのがエヴリス・シュルロ女史である。寺田さんはかねがねこのセンターの活動に注目し、その紹介に努めてこられ、一昨年エッソの助成金を得て、「ルトラヴィエ」を中心とするフランスの再就職教育制度の本格的な調査と研究に取り組まれた。その報告書が本書であり、じつに多くの示唆を与えてくれる。

ご希望の方は日仏女性資料センター事務局まで送料250円(切手)を添えてお申し込み下さい。報告書は無料。

宛先 〒253 茅ヶ崎市赤松町3-29 中嶋公子

第4回 あなたがつくる女のフェスティバルにご参加下さい!

女のフェスティバル準備会

京阪神の女たちが一堂に会する国際婦人デー恒例の女のフェスティバルが今年もにぎやかに開催されます。今回のメインシンポジウムは「違いから女が見えてくる一障害者と健常者の出会いを今」です。その他「戦争・天皇・女一昭和・平成を斬る」等多彩な催しがいっぱい。ふるってご参加下さい。

とき 1989年3月5日(日) 午前10時～午後5時
ところ 京都市社会教育総合センター 3F
075-802-3141

参加費 前売券 500円 当日券 600円

シンポジウム・パフォーマンス 劇団『態変』
ワイワイトーク「セクシュアリティは選べるか?」
ビデオ上映、ヨーガ、バザー、作品展示他。

連絡先 075-701-9431・075-441-6905

『はぐれんぼの海』をおすすめします。

——日方ヒロコ作品集——

れんが書房新社 (1,600円)

松本 八重子

「ボソボソと話しながら、それでいてときおり、はつとするような発言で本質をつく」そんな人柄の日方ヒロコさんの二冊目の本です。

自叙伝に近いと思われる本書で、日方さんは、足場のないところで生きている一人の人間が状況と厳しく対峙しながら、アイデンティティを確立してゆく過程を描いています。

海辺の村に〈満州〉からの引揚げの子として暮らす少女アサノは病弱なうえに、へまばかりする役立たずの「はぐれんぼ」(はぐれ者)。村の差別的な空気なかで、野太く生きる少女を通して、生きる証しを求めている日方さんの少女時代を重ね合わせて話しは展開します。

やがて、村を出たアサノは「女の分際で、労働者でもない分際で、そして文学もわかっていない分際で……」という幾重もの手枷足枷を一つ一つ断ち切りながら、足を地につけて歩き始めます。それは、未だ照らされていない部分を、自分の力で照らし出す役割をひきうけてゆくことにもなつてゆきました。

現在、日方さんが名古屋で関わっている死刑囚との養子縁組においても、この考え方、この生き方が貫かれていると、私は受けとめています。

文学の世界を「他者と共感できる社会を作つてゆく中で成り立たせたい」という姿勢で書かれた本書をぜひお読み下さい。(松香堂で扱っています)

1988年度 ウイメンズブックスストア
BEST 20

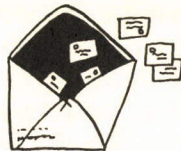
(松香堂刊は除外)

- ①セックス神話解体新書 小倉千加子 学陽書房
- ②女遊び 上野千鶴子 学陽書房
- ③MY FUTURE DESIGN BOOK 中野区婦人会館 学陽書房
- ④「アグネス論争」を読む JICC 出版局
- ⑤フェミニズム入門 別冊宝島85 JICC 出版局
- ⑥法学セミナー増刊 これからの男の自立 日本評論社
- ⑦訣婚パスポート 佐藤文明 現代書館
- ⑧女たちのアジア 松井やより 岩波新書
- ⑨女の本がいっぱい 尼川洋子編著 創元社
- ⑩女のネットワークング 久田恵編著 学陽書房
- ⑪「女縁」が世の中を変える 上野千鶴子・電通 日本経済新聞社
- ⑫女の子の育て方 樋口恵子 光文社文庫
- ⑬女40歳の出発 高橋ますみ 学陽書房
- ⑭ニューウーマン 千葉敦子 三笠書房
- ⑮女という快楽 上野千鶴子 勁草書房
- ⑯こんとんからり 上野・田中美津 木犀社
- ⑰国語辞典にみる女性差別 ことばと女を考える会 三一書房
- ⑱モア・リポート(2) モア・リポート班 集英社
- ⑲ハイブリッドな子供たち 宮迫千鶴 河出書房新社
- ⑳婦人労働の実情(S62年版) 大蔵省印刷局

——カナダ通信——

やっと認められた

妊娠中絶



渡辺久子

カナダでは、これまで、ビルは簡単に手に入れることが出来ても、女性個人の意志による妊娠中絶は、法的にも許されなかった。

ところが、昨年(1988年)の1月28日、カナダの最高裁は、「妊娠中絶を禁止する法律は、女性の生活、自由を侵害するもので、カナダ憲法に違反する」という画期的な判決を下した。この判決は事実上、女性の意志によって、いかなる場合においても中絶をしたければ、ということである。1969年には、「その妊娠が母体の生命に危険を及ぼすなどの特殊な場合に限り、正式認可された病院の医師の過半数が認めた上で、中絶を許可する」という法案が作られていたが、今回の判決は、この法案をも無効にしてしまうものである。

モーゲンテラー博士の中絶クリニック

このような判決が下されるに至るまでには、20年来中絶禁止法と闘ってきた中絶クリニックを営む、ドクター、ヘンリー・モーゲンテラー博士と、彼を支持する自由と権利を求める女性たちの苦難の道があった。

1968年、モーゲンテラー博士は、違法を承知でモントリオールに妊娠中絶のクリニックを開業した。しかし、カトリックなどの宗教的な影響もあって、中絶に反対する人々は予想以上に多かった。1970年、モントリオールのクリニックが、警察の手入れをうけて以来18年間、モーゲンテラー博士は度々逮捕されたり、懲役刑を受け10か月間も刑務所に入ったり、反対派の人々から嫌がらせをされたりと、惨々な目に会ってきた。新聞、テレビ、ラジオでも、モーゲンテラー博士の名が毎日のように登場し、クリニック前での支持派と反対派の衝突などがよく報道された。1983年、度々の苦難にもめげず、博士はさらに、ウィニペグとトロントに中絶クリニックを開業した。それ以来、トロントのクリニックでも反対派の抗議

デモが繰り返された。

中絶反対派と宗教

反対派の主張は「母体に宿ったひとつの生命を抹殺することは『殺人』である」ということで、これからもさらに妊娠中絶を禁止させるよう圧力をかけると息巻いている。胎児の写真入りのハガキを配布して、生命の尊さをアピールする運動も始めた。

カナダでは、日本では考えられないほど宗教の影響が大きく、個人主義とはいっても、宗教に支配されている人もかなりいる。まして、カナダにはアメリカよりもカトリック教徒が多く、保守的傾向が強い。セックスについてもカナダの若い女性には「結婚するまではバージンで」という人が意外とたくさんいる。こういう状況を考え合わせると、妊娠中絶反対派が根強いことにもうなずける。

モーゲンテラー博士を支持してきた女性たちは「この判決によって、女性が自分の体を自分自身でコントロールできるという、人間としての基本的な権利が認められた」と感慨深げだった。

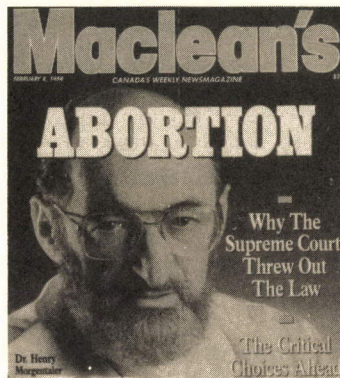
マザー・テレサ、カナダに飛ぶ

どちらのいい分にも一理あり、この対立はまだ当分続きそうだ。実際、9月17日には、カトリック尼のマザー・テレサが、中絶反対ラリーに参加するためカナダを訪れて、オタワの連邦会議議事堂前広場で「中絶をした医師と女性は監獄に入れるべきだ」と演説したり、10月29日には、トロントにあるモーゲンテラー博士の中絶クリニック前で、中絶反対派と支持派が衝突、大乱闘となり、合計40人が逮捕されるなど、まだまだ波乱含みである。

日本では、妊娠中絶は簡単に行われてきたが、ビルなどはなかなか普及しない。どちらも女性の体を守る手段であると共に、傷つけるものでもある。まして、妊娠と

いう事はひとつの生命を宿すことなのだから、妊娠中絶が認められても安易に手術を受ける前に、女性ひとりひとりが理性を持って行動し、自分の体を大切にしたいと思う。

(オタワ発)



私も読んでいます!—30号に寄せて

ウイメンズブックスは創刊30号を迎えました。それを記念して当初からの会員の方々にアンケートをお願いしメッセージをお寄せいただきました。(50音順)

人が動く目と目が廻る。25年前から「通販」が頼り。本の「通販」ウイメンズブックスは、私の大切な本屋です。

赤松 彰子 (保健婦 兵庫)

よくつづいたねえ、というのが実感。いつまでつづくかなあ、という予感。ザウーっとつづけてね、と万感。

上野千鶴子 (社会学者 京都)

なぜ「女」なのか? 悩み続けて間もなく40歳になります。WB で 紹介して頂いた本の数々が私の生きる支えです。

江口しめお (学校事務職員 佐賀)

ちょっとした言葉の使い方から評者の批判意識を感じて面白く思うことがあります。志を持続させてください。

海老坂 武 (フランス文学者 東京)

創刊30号、立派です。情報氾濫の時代に、女性の本に焦点をしばった貴誌は、女性問題の貴重な羅針盤です。

鹿島 光代 (編集者 東京)

こんなにも多くの女たちが、考え、表現していることに励まされます。編集者の暖かな眼くばりの故ですね。

加納実紀代 (銃後史研究 神奈川)

ライターたちよ、もっともっと沢山女の本が出せるようになるためにもフェミニスト編集者を大切に!

亀山美知子 (教員 京都)

私はウイメンズブックスを読んでいます。私が読んでいます。私も読んでいます。WBは貴重な女のメディア。

河野貴代美 (心理カウンセラー 東京)

創刊号からの愛読者です。単なるほめ言葉でなくするどい批判、正確な評価で、ますます貴誌の価値を高めて!

正路 怜子 (創元社編集者 大阪)

15部ずつファイルして只今二冊机に至近の本棚にサン然と。私にとっては便利で楽しいフェミニズム百科大辞典。

杉原登喜子 (エッセイスト 京都)

簡にして要を得た紹介文につられて、そのつど何冊も買い込んでしまいます。これからもよい出会いを期しつつ。

角田由紀子 (弁護士 東京)

11号から全部ファイルしています。こんなに多くの人が女性の問題を真剣に考えているのかと心強くなります。

富井 明子 (教員 福岡)

フェミニストネットワークを、全国隅々に広げる最も有効な手段であり又、情報センター選書の強力なツール。

橋本ヒロ子 (女性のための情報科学 埼玉)

情報は整理の仕方によって利用価値がまるで違ってくる。女性問題を長年見つけてきた視点からの整理がとても使いやすい。

樋口 恵子 (東京家政大学教授 東京)

八百万部の大マスコミに働いているのに、女にとって本当に必要な情報はウイメンズブックスに頼るのです!

松井やより (朝日新聞編集委員 東京)

山程の出版物のなかから、女にとって本当に必要な本が抽出されているので、書店で本を捜すより能率的です。

丸本百合子 (産婦人科医師 東京)

こんな地道な仕事を8年も! 会報がとどくたびに女たちにたいする情熱を感じています。これはすばらしい!

三木 草子 (教員 京都)

エセ情報氾濫に抗し、女たちの知恵をだしあう大切な場。沖縄やアジアなどにも、しっかりアンテナ張りたいネ。

若尾 典子 (憲法・女性学研究者 沖縄)

連載

ミニコミの女たち

第27回

<WIL, JAPAN>

女のネットワークセンター

金箱 つね子



「だって、一人で仕事していると淋しいんだもの」
 「女友達と何かおもしろいことやりたかったのよ」
 「夫も子供もヤだね、ウチにいたくなかったの」
 と、『WIL JAPAN』(Women Interlink, Japan) 創刊の
 動機を訊ねるとこんな答えばかり。全くこれだからね！
 と言いつつも、このアバウトさが好きな私です。でも、
 ココロザシは皆、高い(ホント?)のです。

昨年二月に0号を出してから、ようやく一年目を迎え
 つつある私たちの『WIL, JAPAN』は、「女のネットワー
 クセンター」の全スタッフで編集発行している、タブロ
 イド版4p.~6p.の新聞です。残念ながら、私自身は創
 刊が決まってから“センター入り”したので、誕生決定
 の経緯についてはよく知らないのです。しかし、スタ
 ッフの性格から想像はよくできる。(必然的な)なりゆ
 き。これしかないでしょうね。

さて、その後の『WIL, JAPAN』を紹介する前に、「女
 のネットワークセンター」について、かんたんに紹介し
 ます。『女のネットワークキング』(学陽書房・87年刊)
 という本をご存知の方は多いと思いますが、センターは
 この本に関わったスタッフが中心になって設立された、
 女たちのネットワークングを目指す運動体です。主な活
 動は、①事務局——センター運営の事務・渉外。②資料
 プロジェクト——女のグループの情報や資料を収集・整
 理。③読書会——フェミニズムの相互学習会！そして
 ④『WIL, JAPAN』の編集発行です。

『WIL, JAPAN』は、女のネットワークングを呼び
 かけ、そのための具体的な場(=紙面)を提供する器と
 もいうべきものです。

紙面構成は、まず特集。女たちが集まって何かをやっ
 ていこうとする時に出てくる問題や、それを解決するた
 めのノウハウ、あるいはもう少し広くテーマをとって、
 現在女たちが抱えている問題をとりあげます。スタッフ
 が書き、他のグループに取材しあるいは執筆してもらう。

現在までに、1号=「平場 ってなあに? 2号=女た
 ちはネットワークングする 3号=女のグループ経済学
 4号=タフなグループをめざしたい!」を特集しまし
 た。5号は「恋愛(異性愛)とフェミニズムの苦しい関
 係(仮)」を予定しています。

そして、特集も含めて、紙面のベースであり要ともい
 うべきものが、女のグループの活動やイベントの紹介、
 報告など、今動きつつある女たちの生の情報の掲載です。

女のグループに限らず、ともすれば“運動”が持つて
 しまいがちな硬直性や教条主義に対して常に批判の目を
 持ち、しかし単なる無知蒙昧の無責任な文句には陥ら
 ない厳しい姿勢を堅持しつつ、『WIL, JAPAN』という開
 かれた場を作っていきたい、そして、近い将来は日本の
 女たちのみならず、アジアや世界の女たちともネット
 ワークの輪を広げていくんだ!と、ホラ、希みは高いの
 です。

『女のネットワークング』という本を手にした時、私
 は“こんなにたくさんの女たちが、いろんな場所で、よ
 くわかんないけどきつと、それぞれがんばってるんだ”
 と、頁を繰っているだけで元気が出てきて、エネルギー
 をもらえたことを思い出します。そんなエネルギーを
 『WIL, JAPAN』も持てたらいいと、スタッフ一同願っ
 ています。

何かやる時はひと声かけて下さい。

そして、女たちの輪を広げましょう!

連絡先 東京都豊島区西池袋2-36-1-901

女のネットワークセンター(4月まで)

Tel 03-980-8913

☆スタッフになりませんか?(会費月2000円)

『WIL, JAPAN』

年4回発行

定期購読料・1000円(年度毎・送料込み)

郵便振替 東京0・181510 ふえみめいと舎

現在ウイメンズ ブックストアで扱っているミニコミ

(第29号発行後に入荷したもの)

- | | |
|---|--|
| <p>「れ組通信 No. 20—天皇報道の異常を憂うほか」
れ組スタジオ・東京 1988年11月 400円</p> <p>「れ組通信 No. 21—初めてレズビアンに会った頃からほか」
1988年12月 400円</p> <p>「れ組通信 No. 22—女性と性愛のボーダー・ラインほか」
1989年1月 400円</p> <p>「We 12月号—特集 マスコミと文化の変容」
1988年11月 550円</p> <p>「We 冬増刊号—'88 We 夏季フォーラムの記録」
1988年12月 700円</p> <p>「We 2・3月号—特集 上すべりの“国際化”」
1989年1月 550円</p> <p>「ことば No. 9—老いをあらわすことば(2)ほか」
1988年12月 800円</p> <p>「WIFE No. 215—特集 息子の結婚・娘の結婚」
1989年1月 450円</p> <p>「シネマジャーナル No. 8—特集 華の乱について」
グループシネマテス 1988年11月 400円</p> <p>「おんなの反逆35—特集・自信ないけれど」
1988年12月 250円</p> <p>「飄駒ライフ No. 3—人見絹枝を知っていますかほか」
ひょうこま舎 1989年12月 600円</p> <p>「婦人通信12月号—わたしの「昭和史」天皇、戦争、男女差別、各国の婚姻法ほか」
1988年12月 250円</p> <p>「婦人通信1月号—学童保育と父親たち、ブラジル日系社会と天皇、優生学とは何かほか」
1989年1月 250円</p> <p>「婦人通信2月号—病にたちむかう、リクルート疑惑とNTTほか」
1989年2月 250円</p> <p>「あごら137号—天皇報道に驚く」
1988年1月 400円</p> <p>「沖縄県女性史研究第7号—教科書裁判“沖縄出張法廷”の証人として。ほか」
1988年12月 500円</p> <p>「行動する女 No. 29—秋のおしゃべり合宿報告」
1988年11月 200円</p> <p>「行動する女 No. 30—2889人のナミダ・都立高校男女定員差別を問う」
1988年12月 200円</p> <p>「行動する女 No. 31—私が見た台湾の女性解放運動ほか」
1989年1月 200円</p> | <p>「婦人通信 No. 202 (社会主義婦人会議) —日常生活に氾濫する性差別広告・ポスター」
1988年12月 300円</p> <p>「婦人通信 No. 203—いま天皇家とむき合う女たち」
1988年1月 300円</p> <p>「烏賊 (いま、いちばんオモシロイ子どもの本の雑誌) No. 32—特集 としょかん！」
烏賊 (いか) の会 1988年7月 200円</p> <p>「烏賊 No. 33—特集 ベリー・メイスン」
1988年8月 200円</p> <p>「烏賊 No. 34—特集 ヤングアダルトによるお盆」
1988年9月 200円</p> <p>「烏賊 No. 35—特集 かん子式図書館こーざ」
1988年10月 200円</p> <p>「今女 (いまじん) 創刊号—アグネス論争の熱い夏、反原発旅のはなむけほか」
今女の会 1988年12月 500円</p> <p>「月刊家族34号—こましゃく談義・ゼロ DK」
家族社 1988年12月 200円</p> <p>「月刊家族35号—新春対談「親性」を奪われた性を生きる男たちの未来は」
1989年1月 200円</p> <p>「地域・家族第30号—天皇モンダイ総力特集」
1988年12月 200円</p> <p>「野合 (愛と性について考えるミニコミ 6号—シングルにはみえる正月)」
SL ネットワーク 1989年1月 100円</p> <p>「第6回女性による老人問題シンポジウム報告集—もしも 私がいま倒れたら」
高齢化社会をよくする女性の会・埼玉県 1988年6月 1200円</p> <p>「月刊地域とうそう215号—特集 合成洗剤と水問題」
ロシナンテ社 1988年11月 500円</p> <p>「月刊地域とうそう216号—特集 働くことと生きること」
1988年12月 600円</p> <p>「女・輪・生きる—おふいす・リブの裁判」
元・鉄連の七人と共に性による仕事差別・賃金差別と闘う会 1989年1月 1200円</p> |
|---|--|

— 書 評 —

『この国は恐ろしい国』

— もう一つの老後 —

関 千枝子 著

農山漁村文化協会



私は、日頃からはたして日本は豊かな国なのかどうかを考えている。ローンを利用しているとはいえども、「持家」も車も電化製品も購入でき、海外旅行にも行ける、外国から、とりわけアジアの国々からは「お金持ち」とみられている。しかし、国民の日常生活は、本当に豊かなのか。また、豊かさの指標は何なのか。著者は、そのひとつとして「老後が安心して暮らせること」をあげているようである。

サブタイトルに「老後」とあるが、老後にいきつくまでの母子家庭の生活難と世間の母子家庭に対する偏見が本書の内容である。数十年後の自らの老後を考える時間も精神的な余裕ももてない母子家庭の生活実態を、宇都宮のわが子を殺した母親の低賃金長時間労働の実情、札幌の生活保護を打ち切られた母親が餓死した事件、広島「児童扶養手当を18歳に引上げる会」の母親たちの老後どころではない一見えてこない老後一話を、素材にして述べている。

著者は、「もっとも“辺境”の位置にいる」母子家庭の老後に関する問題を書こうとしたのであるが、取材を進めていくうちに、母子家庭には老後のことまで考えるゆとりは全くなく、今の生活に追われている実態が浮かび上がってきた。しかし、このことが、やがてやって来であろう貧しい老後を裏打ちしている。低賃金で働いていた労働者には、低額年金が待っており、高い賃金で働いていた労働者には高額な年金が待っている。この格差を埋めるのが社会保障制度の一環である老齢年金であるはずなのだが、実際はそうではない。こういう国が、「世界一のお金持ちというから、いよいよ話はわからなくなる」という著者の意見に、私も賛同する。働いても働いても老後の蓄えはおろか、切りつめるだけ切りつめて生活している人間の存在が、意識的にか無意識的にか忘れられていることは、本当に恐ろしい。

「豊かな国」に確実に存在している貧困をわれわれに知らしめた一冊である。

豊田 裕子 (教員)

上記の書評欄へ投稿をお待ちしています。

女性目で見直した鋭い批評や、視点を変えたユニークなものをお寄せください。

400字詰原稿用紙に2枚、900字前後です。住所とお名前、電話番号も原稿用紙にお書き添えください。掲載させて頂いた方には薄々謝、進呈致します。

「あなたの情報・私の情報」とコラム「私の出会った本」をあなたの主張、伝えたいこと、知って欲しい本、御意見等に御利用ください。600字以内。住所とお名前、電話番号を原稿用紙にお忘れなく。但しこの欄は申しわけありませんが薄々謝も差し上げられませんので念のため。誌面の都合で短くすることがあります。

宛先は 602 京都市上京区下立売通西洞院西入松香堂書店「ウイメンズ ブックス係」です。上記両方とも次号の締切りは 1989年4月20日。

編集室から

◎本誌は創刊8年目を迎え、30号をお届けすることができました。これはひとえに会員の皆様のご支援のためものと感謝の気持ちでいっぱいです。年毎に充実していく女性の本に励まされつつも、机上に積み上がる幾多の本との格闘の連続でした。

◎本号13頁に30号を記念して会員18名の方々からメッセージを頂戴いたしました。北海道から沖縄そして海外まで約2000名の会員の会報として、よりよき女性の本の情報をお届けしたいと気持ちを新たにしています。今後ともよろしくおねがいします。

◎ひとつの時代が終わりました。そこで本号は女たちにとって「昭和」とはどういう時代であったかを検証するために近代女性史を特集いたしました。特に「戦争と女性」の項目にご注目いただければ幸いです。

◎次号は1989年5月20日発行の予定です。(木下明美)